

早坂暁

ダウンタウン・ヒーローズ



す

坂
曉



新潮
社
版

ダウントウン・ヒーローズ

著者／早坂 暁 (はやさか あきら)



発行／1986年9月20日

9刷／1988年5月25日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808

電話・業務部03(266)5111・編集部03(266)5411



印刷所／二光印刷株式会社

製本所／加藤製本株式会社



定価／1150円

© Akira Hayasaka, Printed in Japan. 1986

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-363601-7 C0093

ダウンタウン・ヒーローズ ■ 目次

刺青

7

わが大正座

35

女相撲

57

別嬪さん

97

続・別嬪さん

110

夏が来れば思い出す

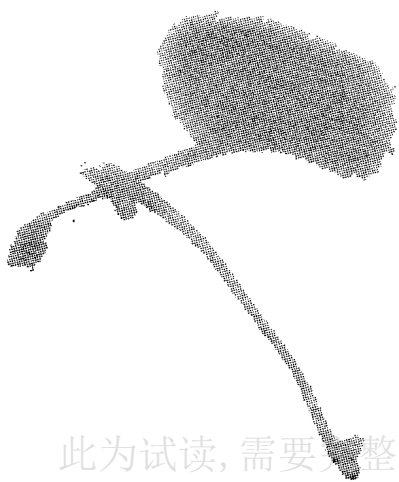
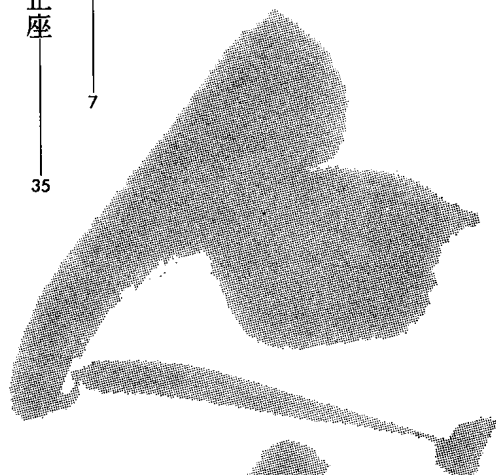
125

「理髪師チッターライン」

167

松山マフィア

209





装画・本文絵 伊藤方也

ダウンタウン・ヒーローズ

刺 青

1

背中のT A T T O Oでは人知れず苦勞をしてきた。

今までずっと隠してきたが、私の背中には鬼女の顔の刺青いれずみが彫うつてある。左肩寄りに、やや天を仰ぐ恰好で目と口を裂いている。解剖所見ふうに書くと「左肩甲骨上部に縦二十四cm、横十八cmのT A T T O Oあり」となる。

昭和二十三年五月、松山市の郊外、海辺の家で彫うった。彫り師は源次郎、通称「彫源」、当時で六十を過ぎていた。広島で仕事をしていたが例の原爆で松山へ引き揚げてきたのだ。

「なにイ、男の癖に白粉彫りじゃと！」

彫源さんは不愉快そうに言った。

「じいちゃん、この人、マッコーセイなんよ」

一緒についてきたイチ子がとりなした。

「マッコーセイで、あのマッコーセイか」

「はあ、松高生です」

つまり松山高等学校の学生という意味である。今でこそどの町にも高等学校はあるけれど、当時の旧制高等学校は全国で三十三校、四国にはたった二つしかない。

「この人、どんだけ出世するか判らんのじゃけん」

イチ子は両手で私の背中をさすった。

例えば、松高生は余程ハメをはずしても警察に引つ張られることはない。下手にいびつたりしていると、その松高生は東大、京大の法学部コースを通り、六、七年で警察署長として赴任してくるかも知れないのである。

「そうか、出世するお人なら、仕様がないなあ」

白粉彫りなら、風呂に入ったり、酒を飲んだり、上気しない限りは模様が肌にあらわれない。彫源は納得して針を手にした。

「喧嘩はよくするんかい」

「ええ」

「利き腕は」

「右です」

それで鬼女の彫りものは左肩にある。つまり、パツと双肌脱いで刺青を見せる時、利き腕のほうを相手側に曝すのは危いからだ。

本当は白粉彫りは女のするものである。色の白い女の肌によく似合って、ひどく色っぽい。しかし女の刺青とはいえ、刺される痛みは男の刺青と同様で、腹這いになっても見える瀬戸の海が、涙で滲んで無数の光の斑点となった。

——俺はなんて阿呆なことをしとるんだろ。

なぜ刺青なんか彫る羽目になったか、まず私を彫源へ連れて行ったイチ子のことから話さねばなら

ない。

2

イチ子は道後松ヶ枝町の女である。松ヶ枝町は温泉町のらだら坂で、坂の両側には遊廓が二十軒ばかり並んでいる。

松山高校は道後松ヶ枝町へは歩いて十五分という恵まれた位置にあった。初めて私が朴蘭の下駄で松ヶ枝町の坂を登っている時、下駄の鼻緒が切れた。

「あ、鼻緒たてたげる」

店の中から走り出てきたのがイチ子であった。——白状すると、坂の途中で鼻緒を切ってみると教えたのは寮の先輩である。つまり、鼻緒をたててくれる女は親切だから、はじめてのお前はその女に決める、そういう女は鼻緒をたてるだけあって、立派にお前の男もたててくれるにちがいない。

なるほどイチ子は初めての私を優しく扱ってくれ、あげく「ええなあ、立派じゃなあ」と私の男を賞めそやしてくれたので、その後の人生までなんとなく自信に満ちて見渡せたのだった。

イチ子が私の初めての女である。私より二つ上だったから二十歳。南伊予の段々畑の村の出身で、段々畑を登り降りするせいか少しばかり脚が湾曲している。しかし色が抜けるように白かった。私たちはまちイチ子に夢中になって、寮に半分、遊廓に半分という暮らしになった。松高生のなかにはずっと遊廓にいて、そこから学校へ時折顔を出す男もいたから、私などのことは驚くに当らない。

ずっと遊廓で暮しているのは鎌田という独文の五年生で、つまり二度落第しているのだが、松ヶ枝町の坂道で出会うと必ず、

「フィリスター、フィリスター、ゾー、ゲナンテン、ジイ」

とつぶやいてみせる。独乙語なのは判るが意味がよく判らない。会うたんびに同じことをいうので

次第に意味が判ってきた。

「Phlister, Phlister, so genannten sie, —— 俗物だ、俗物だと世間の連中は私のことを言うけれど……」

シヨウベンハウエルの言葉なんだそうだ。

さて、イチ子の背中には白粉彫りがある。あまりに綺麗な肌をしているので客にすすめられて彫源で彫ってもらったのだ。絵柄は鬼女の顔である。風呂に入った時も美しいが、なんといっても、あの時が素晴らしい。

「ねえ、ねえ、たまらんよう」

イチ子のクライマックス語はいつもこうであるが、上氣した肌に浮かびあがる鬼女の顔はたまらない眺めである。すでにお判りかと思うが、イチ子は氣に入った相手には、つねに後背を見せて構える。

「俺も同じようなの、彫ってみようか」

「あはは、アリガト」

「いや、ほんとにだよ」

「あはは、ウレシイ」

本氣にしない。もちろん私も本氣で彫るつもりはない。

寮は一部屋三人で住んでいる。戦後の焼跡に急造した寮なので、一人当り二畳の、どこか監獄に似た作りであった。

「アルル、あれをやってくれんかな」

アルルは長崎から来た男で理科甲の学生である。焼跡から拾ってきたような鍋を、物理大辞典やフリュートと同じくらい大切に持ち歩き、茄子、胡瓜のたぐいを見事に薄く切ってさらっと油でいためるのが得意であった。アルルはのちに阪大工学部を出て中国電力に入り、ダム屋になった。中国山系

のあちこちに水力発電用のダムを作るのである。そしてアルルの作ったダムはダム業界の国際賞をとった。

「すごいなあ、アルル」

アルルの作ったダムは、セメントの使用量がとび抜けて少い。つまり薄い壁のダムである。

「エヘへ、茄子を薄うく切る、あのコツや」

まったくアルルのやる事は生涯一貫していて気持がいい。

「そのかわり、広島を動けんようになった」

広島の際にアルルの作った大きなダムがある。セメント節約の超薄壁のダムなので作るにあたつて一部に反対があつた。万一ダムがこわれたら広島市は水びたしになる。「大丈夫です。現にボクが広島市に住んでいるじゃないですか」と見得を切つたため、アルルは停年退職後も広島に住むことになつてゐる。

「おい、アルル、やつてくれよ」

アルルが愛蔵のフリュートで吹けるのはただの一曲である。――「アルルの女」。

夜の明け放した窓辺に腰かけて、アルルが吹く「アルルの女」は、高原の澄んだ空気をふるわせるように美しく、うまくすれば松ヶ枝町のイチ子まで届きそうであつた。しかしその頃、私はイチ子に腹を立てていた。

「あ、かんにん。今日はお乳触らんといて」

今夜だけでいいと言うけれど、イチ子の乳房は真っ白で、その頂きが薄紅色を二刷けしたようになつており、触らずにはいられない。

「かんにん。ゆうべ、バタヤンさんが来たん」

「バタヤンさん？」

「タバタ、ヨシオ」

そういえば、バタやんの愛称を持つスーパー人気歌手が松山に來演していた。そのバタやんがイチ子の店へ來て、イチ子を買ったのだ。

「今晚だけでええから、ね、触らんといて」

私は出世含みとは言えたあの学生。相手は「何が不足で大利根暮し、ただいま人気絶頂の流行歌手である。イチ子が両の乳房を一晚だけのメモリアルホールにする気持は判らなくもないが、私は不愉快になった。以後三十数年、タバタヨシオ氏の「大利根月夜」は一度も歌っていない。私は根にもつタイプなのである。しかし、「元をただせばお玉ヶ池で、人に知られた平手造酒……」。いい唄なんですよ。

ところでアルルの吹く「アルルの女」を聞いているのはいつも私一人である。もう一人の同室者オンケルは夜ともなると、いない。雨が降ろうが雪が……、四国松山はほとんど雪は降らない。

「オンケルは毎晩どこに行つとるんぞな」

小父さんと言われるだけあつて、大きな体の彼は、いつもこう答える。

「歩いとる」

「雨でも」

「ああ、雨でも歩いとる」

オンケルは理科乙の学生で、長野から來ていた。海を見たことないから、海辺で三年間暮そうと考へ、松山高校へ入学した。そこらあたり旧制高校生はドイツの遍歴学生を気取るところがあつた。

ある晩、オンケルが帰つてきた。その帰り方が異様であつた。声も出ないほどに息が切れている。裸足のままで畳の上にうつぶせてしまった。足の裏は泥にまじつて血がふき出している。

「どうしたんじゃ、オンケル」

「……追われた」

「誰に。ヤクザか」

「……警官じゃ」

「松高生を追わえるとは、ええ度胸のお巡りじゃのう」

「いや、あいつは正しい。わしは……泥棒じゃけん」

「泥棒！」

オンケルは、十八歳とも思えぬ大人びた顔で、大きくうなずいた。

「……泥棒はいかんなあ」

しかし、このオンケルの泥棒のせいで、私は背中に刺青を彫ることになったのである。

「泥棒は、ちよつといかんぞな」

とは口で言っているが、足の裏を血だらけにして逃げ帰った友の姿に、私はもう畏敬に似た感情を抱いていた。

なにしろ友が黙ってポケットから取り出したものは、小さなピロイドの箱で、開くと燦然と光を放つ指輪が入っている。

「これ、ダイヤモンドか」

「ああ、ダイヤモンドじゃ」

「本物か」

「光り具合を見たら判るじゃろが」

判るところか、私がダイヤモンドを見るのはその時が初めてであった。

「まあ、この松山じゃ三本の指に入るダイヤじゃろな」

「……どこで盗^とって来た」

「それは言えん」

「なんで言えんのじゃ」

「返しに行くから言えん」

「えッ、返しに行くんか」

「当り前ぞな。わしはプロじゃない。アマチュアじゃけん、盗ったものは黙って元の所へ返しとく」
わが寮友オンケルは、アマチュアの泥棒だったのである。

3

オンケルがはじめて泥棒をしたのは中学二年の時であった。信州松本の繁華街にある本屋で植物図鑑を万引した。

「……思ったよりドキドキもせんで、うまく引けた」

低い声でつぶやくように喋^{しゃべ}るオンケルは、どこかケルケゴールの顔写真に似ていて、魅力があった。その頃は実存主義が流行^{はや}っていて、理科生の私たちでもケルケゴールの「誘惑者の日記」を読んだりしていた。

「……別の店でも、うまく引けた」

週に一回ずつ、本屋をかえて万引した。松本には四軒の大きな本屋があったので、一軒あたり月一回ということになる。

「失敗なしか」

「うん。百科事典が一番大変じゃったが、なんとかやれた」

「百科事典！」